

研究報告書

コロナ禍における「学び合い」の実践
～授業や特別活動での ICT の活用を手立てとして～

大分市立上野ヶ丘中学校

赤木 まき

1 研究主題

コロナ禍における「学び合い」の実践
～授業や特別活動での ICT の活用を手立てとして～

2 主題設定の理由

令和3年度から中学校で全面実施となる新学習指導要領では、「主体的・対話的な深い学び」が重要視されている。「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学びである。「対話的な学び」とは、子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学びである。「深い学び」とは、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。これら3つの学びを深めるための手立てとして、「学び合い」の形を、授業をはじめ、学校の教育活動のあらゆる場面で取り入れていくことが効果的であると考えられる。

また、新学習指導要領では、「情報活用能力」を「言語能力」と同様に、「学習の基盤となる資質・能力」であると位置づけ、各教科だけではなく、横断的にその力の育成を図ることと明記されている。令和2年3月に大分県教育委員会より示された「ICT活用教育推進プラン2020」では、4つの基本方針を示している。基本方針1の「子どもたちの情報活用能力の向上」では、全ての子どもたちが超スマート社会を主体的に生きる力を育むために、各教科等のねらいに応じて、学習活動の中にICTを効果的に活用する場面を取り入れ、子どもたちの情報活用能力の向上を図っている。

これまで、初任者研修では教育センターでの研修や5回の提案授業、スマイルファイルなどを通して、生徒理解の力をもとにした実践的指導力をつける取り組みを、2年目研修では、グループごとに課題を設定した授業力向上に向けての取り組みを行ってきた。3年目研修に向けてどのような取り組みを行おうかと考えていた矢先、新型コロナウイルスによる、臨時休業、感染症対策を徹底したうでの学校再開という、未知なる状況へ立ち向かう必要性にせまられた。これまで行っていた活動の見直しが必要になるなかで、ICTの活用を積極的に行うことができるのではないかと考えた。ICTを通じた「学び合い」ができるのではないかと考えた。国語科の教員としての立場と生徒会担当としての立場からICTを活用し、「主体的な学び」につながる「学び合い」を実践していくことにした。また、特別活動の場面においても、例年通りの行事や活動が行えない状況にある。制約があるなかでできることはないか、どのような形がとれるのかを生徒自身が考え、提案し、実践していく場面が増えていくであろう。そこで、ICTを積極的に活用することで、自分で考え、交流し、新たな考えに気づき、自分の考えを再考することができると思った。授業に限らず様々な場面で「学び合い」の機会を設けることで、「学び合い」の経験を日常生活につなげて生かしていくことができるのではないだろうか。

以上のことから、活動に制約があるなかでも ICT を効果的に活用することができれば、「学び合い」を実現していくことができるのではないかと考え、本研究の主題を、「コロナ禍における「学び合い」の実践～授業や特別活動での ICT の活用を手立てとして～」と設定した。

3 研究仮説

研究主題である「コロナ禍における「学び合い」の実践～授業や特別活動での ICT の活用を手立てとして～」をふまえ、本研究の仮説を「授業や特別活動の時間において、ICT の効果的な活用ができれば、制約がある中でも「学び合い」を実践し、「主体的・対話的で深い学び」を通じた力をつけることができるであろう」と設定する。

4 研究内容・方法

(1) 研究主題の捉え方

コロナ禍における「学び合い」の実践
～授業や特別活動での ICT の活用を手立てとして～

【学び合い】

新学習指導要領で提言されている、「主体的な学び」を促すために効果を発揮する「学び合い」は、本校の今年度の研究主題でもあり、学校全体としても授業改善のテーマとして取り組んできた。本校の研修における「学び合い」の定義は、「班やペアなど小集団や全体のつながりのなかで、ひとりひとりが自らの課題を引き受け、主体的に学習に参加し、理解を深める活動」である。

さらに国語科における「学び合い」の形について、話し合い活動の目的は、①個々の考えや文章・資料から読み取った内容について「知る」、②話し合いを通して、新たな考えや文章・資料の読み方に「気づく」、③気づいた考えや読み取ったことをもとにして自分の考えを「再構築する」という3つにあると考えた。また、感染症対策として、話し合い活動ができない状況になった際には話し合い活動に代わる手立てとして、ICTでの考えの交流や「書く」活動を一層重視して、文章や自分との対話による学び合いを目指すこととした。

よって、本研究における「学び合い」を「小集団や全体のつながりのなかで、ひとりひとりが自らの課題を引き受け、主体的に学習や活動に参加し、理解を深める活動」と定義して、実践していく。

○国語科における「主体的な学び」

高木（2017）は、国語科における「主体的・対話的な深い学び」について、次のように述べている。

生徒ひとりひとりがまず、個人として主体的に、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域の内容と言語事項の内容とに関わる言語活動を行う。

そして、このひとりひとりの主体的な言語活動は、教室という協働の学びの場において他者との対話によって、他者と関わりながら自己相対化を図りつつ、自己の国語の「見方・考え方」を深めたり広げたりする自己認識を行っている。その自己認識の内容を自覚することが「深い学び」となる。

○特別活動における「主体的な学び」

美谷島（2018）によると、特別活動における「主体的な学び」の実現とは、「学校での様々な集団活動を通して、生活上の諸課題を見だし解決できるようにすること」であり、そのためには、「生徒の課題発見の活動の工夫改善を図ることも重要」であり、また、「解決方法を決め、実践させ、振り返らせ、PDCAサイクルで評価することも効果的」であると述べている。生徒自身が課題発見や目標設定をし、その達成を図ろうとすることが主体的な学びにつながるのである。

【ICT】

○ICTの種類と活用の場面

中学校において活用が見込まれる ICT 機器は、パソコンだけでなく、プロジェクタ、書画カメラ、電子黒板、デジタルカメラ、スキャナなどがある。パソコンでは、授業者による教材の提示、生徒による資料作成、資料集めなどができる。プロジェクタや書画カメラでは生徒のワークシートなどを提示することができる。

(2) 仮説を検証するための方法

研究実践は、以下の場面で行う。

- ・国語科の授業において、資料を提示するために用いる。
- ・国語科の授業において、話し合い活動・意見の共有の目的で用いる。
- ・特別活動において、ICTの活用が期待できる場面で積極的に用いる。

以上の3つの場面で、実践し、生徒の発言や反応、記述内容、ICTを用いて作成した資料、教科のマイスターによる見取りや互見授業による他の教員による見取りによって、実践の成果を検証する。

5 研究の実際と考察

(1) 実践の記録

【国語】

○分散登校時の PowerPoint での授業展開（1学期）

分散登校が始まり、クラスを半分に分けて授業をすることになった。今までの倍の授業をすることになったため、毎時間同じ内容をすべてのクラスに確実に伝えられるよう、PowerPointで教材をつくり、授業を行った。また、話し合いや発言ができず、受け身の授業になってしまうため、画像やイラストなどを多用した資料にすることで、少しでも生徒の興味をひくものとなるよう工夫した。（資料Ⅰ）

<考察>

1学期末に実施した学校評価アンケートでは、「授業はわかりやすい」という項目について、肯定的な回答が83%であった。しかし、授業評価アンケートには、「話し合い活動を行いたい」という生徒の声が複数挙げられた。そこで2学期は、話し合い活動を通した「学び合い」の形について、感染症対策を講じながらできる方法を考え、実践することにした。

○まなびポケット「ムーブノート」の活用（2学期）

3年生の国語「故郷」で、情景描写の比較と人物描写の比較を通して、故郷の変化を考える活動（資料Ⅱ）のために、ムーブノートのマーキング集計機能を活用することにした。（資料Ⅲ）また、集計したデータを根拠にして、課題を見出し、課題に対する考えをカードにまとめ、発表し、意見を交流した。（資料Ⅳ）

<考察>

生徒は、タブレットを教室に準備した瞬間から、その時間の授業に興味をもつ。さらに、まなびポケットを使った新たな機能を実践するとなるとさらに意欲的な姿勢をみせた。特に人物描写の比較の場面では、扱った「ヤンおばさん」への生徒の興味がもともと高かったことに加え、タブレットを用いた学習ということで、生徒が主体的に課題を引き受け、学習や活動に参加し、理解を深めようとする姿があった。

この單元では、故郷の情景描写の変化を比較する場面（資料Ⅱ-①、Ⅲ）と、登場人物の描かれ方の変化とその原因を探る場面（資料Ⅱ-②、Ⅲ、Ⅳ）の2回、授業観察をしていただいた。

情景描写の比較では、国語マイスターの先生に授業を見ていただいた。その時いただいた所感は以下のとおりである。

- 1時間の流れが明確、見通しが立つため生徒の意欲が高まった。
 - NHK for Schoolによる10分間の動画視聴で、異国の時代も異なる物語への理解が深まっていた。
 - タブレットを通して情景描写を集計するという取り組み、斬新で、操作する生徒の順応に驚いた。すべての班の考えを共有できる点でも素晴らしい。
- 登場人物の描かれ方の変化とその原因を探る回では、互見授業を行い、管理職の先生方や国語科の先生方に授業を見ていただいた。その時の所感は以下の通りである。
- 課題に到達するまでの学習過程がスムーズで、生徒が課題をすんなりと引き受けていた。
 - 班で思考する場面とその結果を入力する場面の時間配分が、教師の助言を参考に意欲的にできていた。
 - 入力作業中、入力しない生徒は教科書を各自で読み込んでいた。
 - 普段目にしないものの説明に画像を示したため、理解につながった。

○ICT を使用した話し合いと発表により、効率的に授業を進めることができている。集計機能は分かりやすくよい。

○ICT の扱いについて、教師も生徒も慣れていて、活用していると分かった。
△文中から暮らし向きや社会が変わってしまったことを読み取ることが課題解決の手立てにつながるため、その読み取りがあるとよい。

ICTはいきなり使えるようになるものではない。継続的な活用が必要である。ただ、普段からタブレットやスマートフォンを使う機会の多い生徒にとっては、ICT を用いて授業を行うということに対する苦手意識はほとんどなく、むしろ積極的に使いたがる。また、使用する機会と、使い方の手順を最初に示しておけば、自分たちで活用の仕方を工夫して改善していくことができるということが分かった。

【特別活動】

○タブレット端末の貸与による議案書作成（1学期）

臨時休業により、年間行事の見直しが必要となったため、提案予定であった議案書の大幅な見直しが必要となったが、学校で専門委員長同士や担当の教員との打ち合わせをしながらつくることができなくなった。そこで、臨時休業中に3年生の学習補充のために貸し出していた教育用端末を活用することにした。方法は、議案書をExcelで作成し、まなびポケットの「チャンネル」機能で提出、担当教員が確認し、修正などがあれば、「スクールタクト」のコメント機能を使ってやりとりを行うことにした。（資料V）

<考察>

これまで取り組んだことのない作業にはじめは驚いていた生徒たちだが、新たな試みに対して興味をもち、意欲的に取り組む様子がみられた。パソコンでのデータ作成になるため、得意な生徒と苦手な生徒が出てくるのではないかと思っていたが、どの生徒もつまずくことなくスムーズに作業が進んだ。複数で作成する委員会については、お互いに意見を出し合いながら、得意な生徒がデータを入力するという姿もみられた。議案書の作成は前期の執行部が行ったが、前期がおわる頃に、「臨時休業中パソコンで議案書を作った」という経験に対して、誇らしげに話していた生徒の姿が印象に残っている。

今まで生徒が手書きで作成してきた議案書だが、データ化することによる利点がいくつか見つかった。一つ目は原稿の修正がしやすいことである。また、下書きをして清書でなぞる必要もない。二つ目は形式を統一しやすいことである。今までは委員会ごとに書き方に少しずつ差があったのだが、統一したデータを使用することで、すべての委員会が統一された。三つ目は、作業の効率化である。生徒のなかでは、生徒会執行部に対して、行事の準備などに時間がかかり、放課後は会議ばかりであるというイメージがある。生徒の負担を少しでも軽減し、別の活動への力にしてほしいという思いから、効率的に作業できるデータ化は有効であったといえる。

○行事での活用（2学期）

市総体激励会、文化発表会などリモートを駆使して実施した。特に文化発表会では、体育館にはひとつの学年のみが入場し、プログラムごとに交代して、他の学年は教室から zoom でつないだ体育館の映像をみることになった。学年企画、生徒会行事、開閉幕行事のすべてをリモートで実施することになり、実行委員会、各学年がどのような形で発表を行うか考え、各企画、動画や PowerPoint、リモート合唱などを交えながら創意工夫のある発表を行った。

<考察>

2学期の生徒会の活動について、先生方からいただいた意見は以下のとおりである。

○コロナウイルス感染症で厳しいなか、生徒の自主的な活動で運営できていて立派である。

○体育大会、文化発表会を通して、限られた時間の中で彼らなりに準備し、学年を動かせるようになってきた。

○生徒を変えられるのは生徒。生徒会の影響力は多大である。いかに熱意を伝えられるか、いかに大きな渦を作っているか。子どもたちの変容にわくわくしている。生徒会執行部と一般生徒との距離が広がらないようにしたい。

△執行部・学級委員だけでなく、彼らを支える周りも巻き込めるような取り組みを行っていかなければならない。

生徒自身の振り返りでも、行事を通して、自分たちでできることを考え、それが実践できたことに達成感を抱いている様子が書かれていた。

6 研究の課題と成果

感染症対策をとったうえでの教育活動を日々模索しながら実践していくなかで、1学期末に実施した学校評価アンケート、授業評価アンケートでは、「授業はわかりやすい」という項目について、肯定的な回答が83%であった。また、授業評価アンケートでは「話し合い活動がしたい」という意見が複数挙げられていた。ソーシャルディスタンスの重要性が説かれるなかで、話し合い活動に意欲的な本校の生徒にとって、話し合い活動をしたという思いが増していたことが分かった。

それを受けて2学期は、まなびポケットを活用し、話し合い活動を取り入れた。その結果、2学期末の学校評価アンケートでは、「授業はわかりやすい」という項目について、肯定的な回答が86%に上昇した。

ICTの活用は、生徒の興味関心を強くする点、距離を気にせず、機器さえあれば離れた場所からでもやり取りができる点で、極めて有効な手段である。授業で生徒にタブレットを使わせたことによる利点として、思わぬ発見となったのは、普段は教室の中であまり積極的に、中心となって活躍するタイプではない生徒が活躍する姿がみられたことである。学習が苦手な生徒でも、パソコン操作が得意、PowerPointによる資料作りが得意、画像

や動画編集が得意という生徒が、授業や行事の資料作りなどの場面で活躍することができるのである。

「学び合い」という観点からは少し離れるが、今回 ICT の活用というデジタルな要素に焦点を当ててきた研究だが、その過程でアナログなツールの必要性や利点にも気づかされた。古典の授業の際には、仮名遣いや表現技法、意味、資料となる画像などを PowerPoint で作成し、提示しながら授業を行っている。ワークシートを、普段はパソコンで作り、配布しているのだが、古典の教材に限っては、筆のくずし字で書き写され、現在に形を残してきたという雰囲気は少しでも出したいと、手書きのワークシートを使っている。活字を目にする機会の多い生徒にとっては、手書きのワークシートに珍しさを感じるようで、配布したとき、「誰の字ですか」「字がかわいい」など生徒の反応が大きく、とても好印象であった。アナログ、デジタルのどちらにも利点・欠点があり、場面に応じて使い分けることが有効である。

「班やペアなど小集団や全体のつながりのなかで、ひとりひとりが自らの課題を引き受け、主体的に学習に参加し、理解を深める活動」という「学び合い」について、いくつかの場面で、ICT を活用して実践をしてきた。ICT を使用することが、生徒の意欲を高め、課題を引き受けて、学習したいという姿につながった。また、制約の中で何ができるかを常に考える必要のあった今年は、新たな形・手段として ICT を使うという選択肢がいままで以上に増えた。取り組んだことのないことであるため、生徒は今まで以上に PDCA サイクルを意識した活動を行うことができたと思う。

7 研究のまとめ

今回3年目研修という機会に、研究主題である「コロナ禍における「学び合い」の実践～授業や特別活動における ICT の活用を手立てとして～」に沿って実践を行った。この実践を通して分かったことは、生徒にとって ICT を用いることは学習意欲を高めるために有効であること、その結果主体的に学ぼうとする姿勢がみられるということである。今後はこの研究を生かし、さらなる ICT の活用技術を身につけ、ICT を通した「学び合い」を実践していきたい。

【参考・引用文献】

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）

ICT 活用教育推進プラン 2020（2020） 大分県教育委員会

平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座国語（2017） 高木展郎編 ぎょうせい

平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座特別活動（2018）

城戸茂・島田光美・美谷島正義・三好仁司編 ぎょうせい

特別活動の指導における ICT の活用について 文部科学省

国語科の指導における ICT の活用について 文部科学省

【資料】

I PowerPoint による授業展開

文法：助詞，助動詞

分散登校中の授業計画

- 1 「春に」① 表現技法
持ち物 教科書
ファイル、ワーク
- 2 「助詞」
持ち物 楽しい文法
ファイル、ワーク
- 3 「春に」②
持ち物 教科書
ファイル、ワーク
- 4 「熟語の読み方」
持ち物 教科書
ファイル、ワーク
吉光先生
- 5 「助動詞」
持ち物 楽しい文法
ファイル、ワーク

今回は「に」注目！

格助詞

主に「格助詞」に付き、文節を作り、文節同士の関係を示す

【覚え方】
をにがとよりで
からのへや
(鬼が戸より出、空の部屋)

「春に」谷川俊太郎

④ 倒置法

これがうまいんだな。
うまいんだな、これが。

語順を変えて意味や印象を強める

「春に」 谷川俊太郎
工夫①
四つの「この気もちはなんだろう」をどう読む？
工夫②
「私」ならどこをどのように読む？
(速さ・間・声の調子・人数・男女の別)
※選んだ場所を□で囲もう。
※朗読の視点を()の中
から二つ以上選び、工夫
することを書こう。

終わったら、
①振り返り
②ワーク、漢字、文法が読書

熟語の読み方

熟語の読み方

二つ以上の漢字が組み合わさってひとつの単語となったもの

めあて
熟語の読み方の種類を知り、分類できるようにする。

- 1 熟語の読み方の種類
 - ①音と音訓と訓
 - ②重箱読み 湯桶読み
 - ③特別な読み方
- 2 複数の読み方をする 熟語 練習問題

Ⅱ 「故郷」簡易指導案①

指導者名 [赤木 まき]

年・組	教科等	単元（主題）及び題材（資料）名	本時
3-3	国語	故郷	1/6
めあて	冒頭から「故郷」の情景描写を探そう。		
課題			
過程	学習活動等		
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○漢字テスト 25 ○NHK for School「故郷」をみて、物語のあらすじと作者について知る ○場面の確認 <ul style="list-style-type: none"> 1 帰郷 2 母・甥との対面 3 回想 4 ヤンおばさんとの再会 5 ルントウとの再会 6 「故郷」を離れる「私」の思い 		
展開	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> めあて：冒頭から「故郷」の情景描写を探そう。 </div>		
終末	<ul style="list-style-type: none"> ○冒頭の場面で「故郷」の情景描写を探し、教科書に線をひく 「寂寥」人影もなく、ひっそりともうの悲しい様子 ○まなびポケット「ムーブノート」を使って、班ごとに線を引いた部分をまとめる ○集計機能を使って、線を引いた部分を全体で確認する ○線を引いた情景描写から「私」がどのような心情かを考える 		

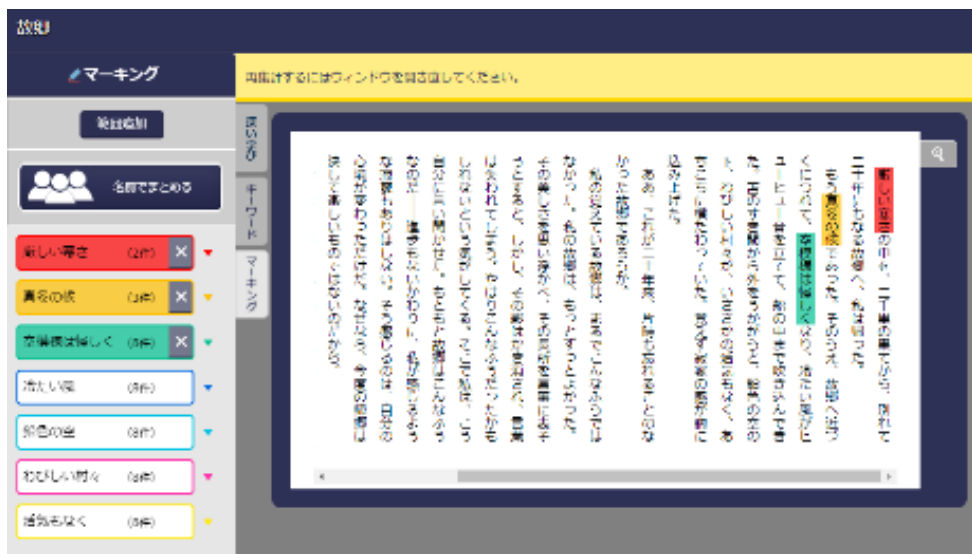
II 「故郷」簡易指導案②

互見授業指導案				
12月 3日 木曜日 5限 授業者(赤木 まき)				
年・組	教科	単元(主題) および題材(資料)	本時	
3年3組	国語	故郷	3	
			6	
ねらい	物語の人物描写の比較を通して、その描写に込められた作者の意図を考えることができる。			
めあて	登場人物の過去と現在を比較してみよう。			
課題	「ルントウ」「ヤンおばさん」を変えたものは何か。			
学び合いをどのような形で取り入れるか	課題に対する答えを、班・全体での交流を通して考えを深めながらまとめていく。			
過程	指導内容・学習活動等			
導入	○本時の学習内容の確認			
	めあて：登場人物の過去と現在を比較してみよう。			
展開	○前時に各自で探した「ルントウ」と「ヤンおばさん」の過去と現在の描写を班で交流し、まとめ、全体で確認する (まなびポケット「ムーブノート」のマーキング集計機能を使用) ※2人はそれぞれ見た目や言動に変化があることに気付く			
	課題：「ルントウ」「ヤンおばさん」が変わった原因は何か。			
	○分担して、2人が変わった原因を考える			
	<分担> . . . 班 ルントウ . . . 班 ヤンおばさん			
	個人：自分の考えをワークシートにまとめる			
	班：意見を出し合い、ムーブノートにまとめて提出			
	全体：スクリーン、PCを通して他の班の考えを知る			
	まとめ：例) 苦しい生活、富裕層と民衆の差、貧しさなど			
	終末	○まとめ・ふりかえり		
特に見てもらいたいところ・アドバイスが欲しい点				
ICTの導入、活用の仕方が効果的であったか 学び合いの課題として適切であったか				

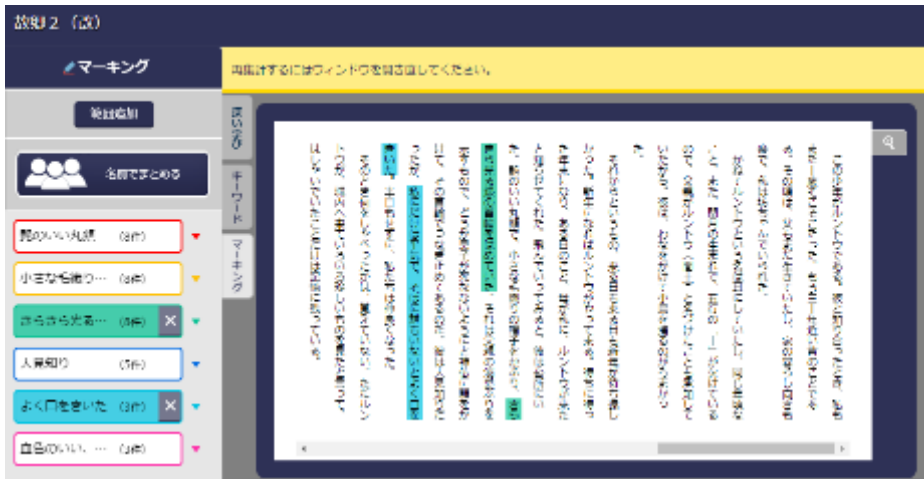
Ⅲ ムーブノート マーキング集計機能



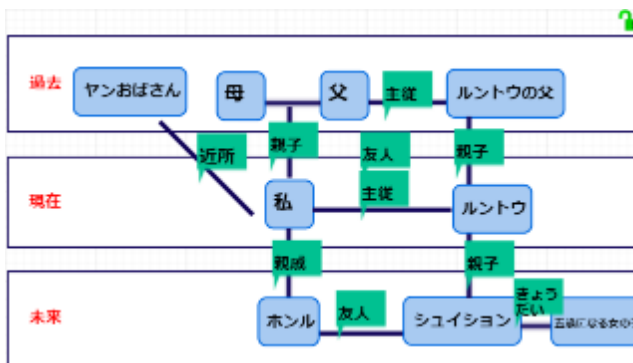
班ごとにみつけた情景描写に線を引き、広場へ提出



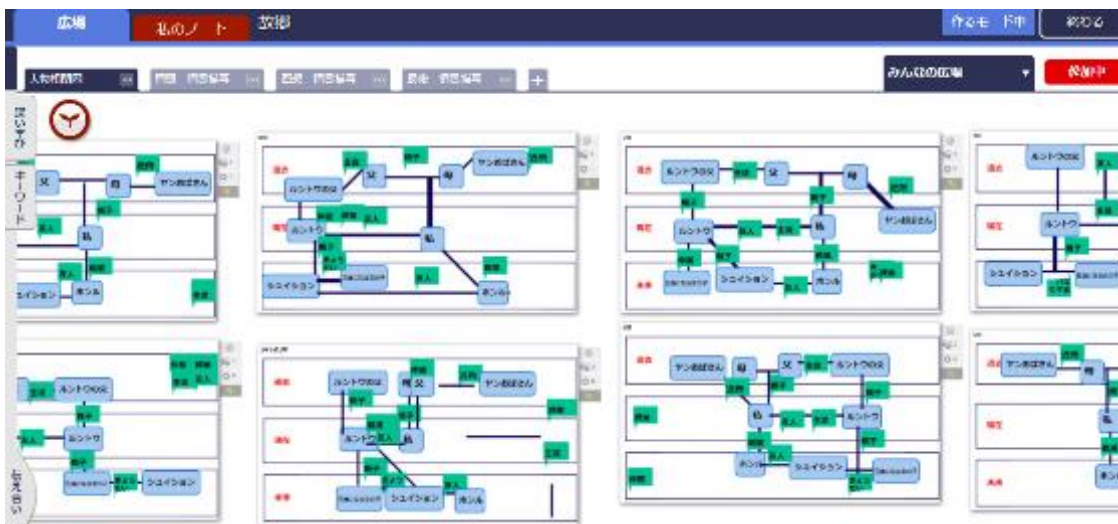
それをキーワードごとにどの班がどこに線を引いたのかを集計



IV ムーブノート カード作成・意見交換



単元 2 時間目 人物相関図を作成





カードに班ごとにでた意見をまとめて広場に送る



送られてきたカードをグループ分けし、それぞれの班が発表

V まなびポケットを活用した議案書作成



まなびポケットのタイムラインで、
執行部のグループを ICT 支援員
の方につくっていただき、各委員
会の議案書のデータと使用上の
注意をお知らせ



専門委員長が提出した議案書の確認後、修正等をスクールタクトのコメント機能にて連絡
専門委員長同士で、どのような議案書にしていくかのやりとりをする際にも使用